

独ノ戦(1941～1945年)

100781137 佐藤友樹

はじめに

a) 独ソ戦

ア) 第二次世界大戦で最大の戦闘

イ) 早期終結から総力戦の泥沼状態へ

→独ソ戦の犠牲者（戦死、戦病死）

ドイツ：約600～1000万人

（兵士約500万人）

ソ連：約2000～3000万人

（兵士約1128万人）

→多くの民間人が犠牲

ウ) ドイツの無条件降伏→敗北

エ) 戦後、ドイツの東西分断統治へ

b) 目的

ア) 独ソ間の関係の悪化の原因

イ) 開戦までの経緯

ウ) 開戦からドイツ敗北までの経緯



以上の考察

第1章

第二次世界大戦前後のドイツとソ連

1. 第二次世界大戦前のドイツとソ連

a) ドイツ

ア) 経済の低迷

ハイパーインフレーションの発生

→世界恐慌(1929年)と

WW I の敗戦による多額の賠償金

イ) 独裁政権の誕生(1933年)

ナチ党: アドルフ・ヒトラー総統

→民族自決主義

周辺諸国のドイツ人居住地域を併合

b) ソ連

ア) ヨシフ・スターリンが権力を掌握

→最高指導者ウラジーミル・レーニン死後

イ) 独裁的権力の保持と政敵の粛清

→処刑や強制収容所での過酷な労働

総数1200万人以上(1937年)

→赤軍の指導者や将校も対象

全将校団の約半数→戦力の大幅な減衰

ウ) スターリンが独裁的社會主義路線を確立

2. 独ソ不可侵条約

a) 独ソ不可侵条約の経緯 利害関係の一致

ア) ドイツ: ポーランド侵攻が目的

→ ソ連の動向が不安

→ ソ連側の安全の保証が不可欠

イ) ソ連: 東欧の覇権獲得が目的

→ 英・仏の動向と自国軍備の不安

→ ドイツによる欧州の騒乱

→ 戦争介入の名目の獲得

→ 情勢の日和見

b) 独ソ不可侵条約締結

(ア) 1938年8月23日

(イ) ソ連：モスクワ

c) 独ソ不可侵条約の内容

(ア) 表面上の内容

→ 独ソ間の武力行使の禁止

→ 対話での問題解決

(イ) 秘密付属議定書 ← 本来の目的

→ 独ソ間の領土分割の密約

(バルト諸国、ポーランド)

3. ポーランド分割とその後

a) ドイツ軍のポーランド侵攻(1939年9月1日)

ア) 工作による侵攻の正当化

→ポーランド側の襲撃を捏造

イ) ドイツ軍、約27日間でワルシャワ陥落

b) ソ連軍、17日にポーランド侵攻←密約

→ドイツの快進撃に驚愕

→ポーランド難民保護の名目

C) 独ソ国境友好条約締結(1939年9月28日)

ア) ドイツとソ連、ポーランドを東西分割

イ) ポーランド政府、フランスへ亡命

→ フランス降伏後、イギリスへ亡命

→ ポーランド、事実上消滅

ウ) 付属議定書

→ 独ソ不可侵条約締結時の密約の修正

D) 英・仏、独へ宣戦布告

→ ドイツのポーランド侵攻

→ 英・仏とポーランドとの安全保障協定

4. 独対英・仏戦

a) ドイツの周辺諸国侵攻(1940年)

ア) 4月、デンマーク・ノルウェー

イ) 5月、オランダ・ベルギー



6月までに停戦または降伏

b) 独対仏戦

ア) ドイツ軍、マジノ防衛線突破

→戦車による電撃戦でマジノ要塞陥落

イ) 防衛線崩壊でフランス軍崩壊

→ドイツ軍、パリを無血占領

→フランス降伏

c) 独対英戦

ア) 英・首相チャーチル

→徹底抗戦を宣言

イ) ドイツ空軍、イギリスへ空爆

→イギリスの防空能力に苦戦

強大な海・空軍を保持

→地下に司令部を設置

→レーダーで独空軍を察知→迎撃

ウ) 独軍、英国本土上陸作戦を断念

→独空軍大打撃

エ) ヒトラーが和平提案(1940年7月19日)

→イギリスは拒否

第2章 独ノ戦開戦

1. 独ソ関係の悪化

- a) ソ連のバルト三国併合(39年9月～40年8月)
 - ア) バルト三国と密約により援助協定を締結
(エストニア・ラトビア・リトアニア)
→同国内にソ連軍の基地を設置
(39年9～10月)
 - イ) フィンランドへ侵略戦争(39年11月30日)
→翌年3月終結

ウ)バルト諸国の主権の廃止(40年6月)

エ)バルト諸国のソ連内での社会主義国化

→数々の侵略行為で英・仏を中心に非難

→国際連盟から除名

b) 領土間での独ソの対立

ア) ドイツはソ連の領土併合を危険視

→バルト、ルーマニア併合

フィンランド戦争

イ) ソ連のバルカン問題の介入

→ドイツのウィーン裁定への不満

→枢軸国間でも不協和音が発生

ウ) 独の同盟国への軍隊派遣



協定違反の非難と対立

c) モロトフ＝ヒトラー会談

ア) 独ソの要求

ドイツ：ソ連の対英戦のドイツ側参戦

→英国奮戦はソ連の共闘期待

ソ連：独ソの条約の改定

→支配勢力範囲の決定を画策

イ) 交渉決裂

→ヒトラー、対ソ戦決意

→独ソ開戦へ

2. 独ソ開戦

a) バルバロッサ作戦

ア) 作戦プラン

電撃戦での早期終結→全土の占領は不可能

→ソ連の要衝の破壊

→政府・軍部上層の壊滅

→指揮・戦闘能力を麻痺

イ) 3方面からの進軍

→北方軍集団、中央軍集団、南方軍集団



DEUTSCHLAND
ドイツ
東部作戦軍の編成
OSTHEER: オストヘーア
(1941年6月22日)

OKH
陸軍総司令部

総予備
第2軍
フォン・ヴァイクス上級大将
第40装甲軍団

- [ドイツ軍]
- 10B 装甲師団
 - 18B 機械化歩兵師団
 - 11B 騎兵師団
 - 22 歩兵師団
 - 25.5A 山岳師団
 - 25.6B 軽師団
- [ルーマニア軍]
- 17D 歩兵師団
 - 13B 騎兵旅団
 - 13A 山岳旅団

南方軍集団

司令官: フォン・ルントシュテット元帥
参謀長: フォン・ゾーテンシュテルン大将

第1装甲集団 フォン・クワイスト 上級大将	第14装甲軍団 第3装甲軍団 第29軍団 第48装甲軍団	WA 14B 29 11B 75 57
第6軍 フォン・ライヘナウ元帥	第17軍団 第44軍団 第55軍団	62 47 29
第6軍予備	第4軍団	22B 24 25 26C 11
第17軍 フォン・シュテッブナー元帥 大将	第49山岳軍団 第52軍団	14 48 52 101B
第17軍予備	ルーマニア派遣軍顧問団	100B 67B
第11軍 フォン・シーボルト 上級大将	ルーマニア山岳軍団 第11軍団 第30軍団 第54軍団	64A 13A 152A 64B 22 75 44 42 14 15B 116 176 50
第11軍予備	ルーマニア第22騎兵軍団	176 50
軍集団予備		99B
OKH予備	第34兵団 第51軍団	44B 123 113 132 20 95

北方軍集団

司令官: フォン・レープ元帥
参謀長: フレンケ中將

第18軍 フォン・キヒラー 上級大将	第26軍団 第38軍団 第1軍団	26 38 11 17 21
第16軍予備	第41装甲軍団 第56装甲軍団	16B 22B 43B 23B
第4装甲集団 ヘプナー上級大将	第10軍団 第28軍団 第2軍団	7 10 12 12 22
第16軍 フシエ上級大将	第19軍団 第2軍団	19 19 22
第16軍予備		22
軍集団予備	第23軍団 第50軍団	23A 23 20 20
OKH予備		20 20

中央軍集団

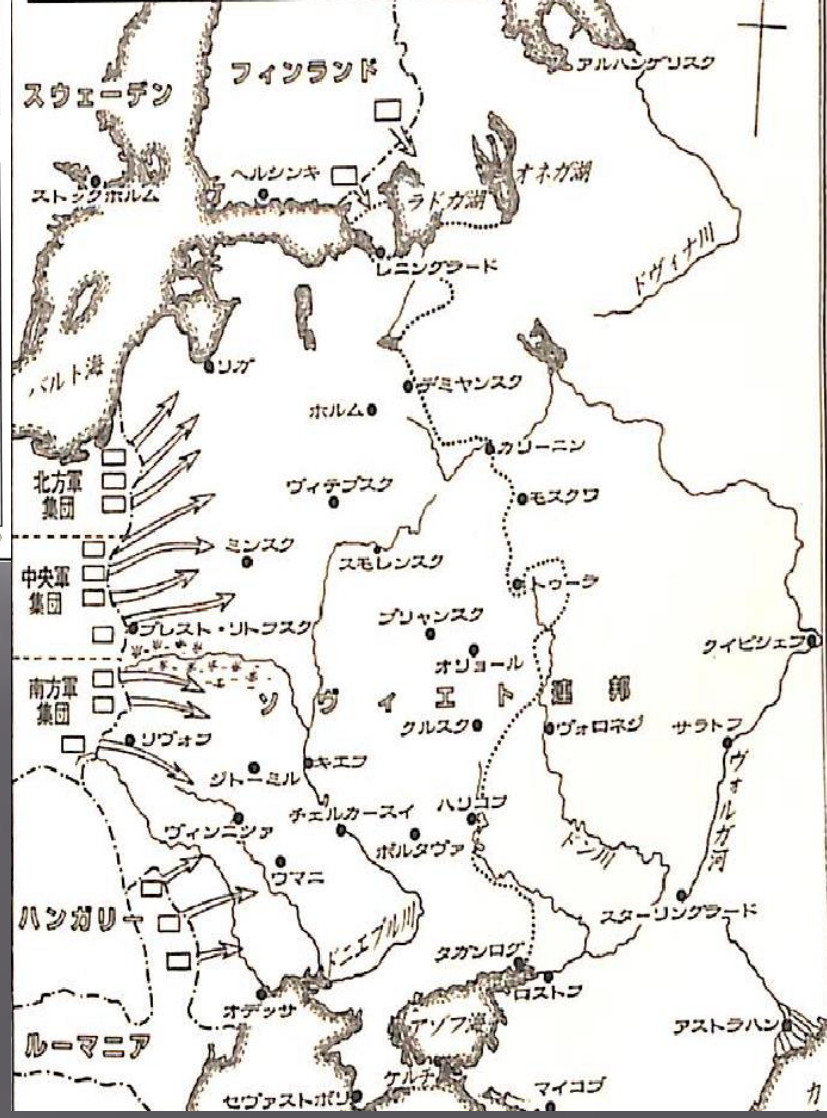
司令官: フォン・ホーク元帥
参謀長: フォン・グライフェンヘルク少將

第3装甲集団 ホト上級大将	第6軍団 第39装甲軍団 第5軍団	6 14B 20B 20B 71B 33 5
第9軍 シュトラウス上級大将	第57装甲軍団 第8軍団 第20軍団 第42軍団	16B 19B 12B 12 10 12 12 7 22
第4軍 フォン・クルーゲ元帥	第7軍団 第13軍団 第9軍団	7 17 7B 22 17 22
第2装甲集団 クラーヴァン上級大将	第48装甲軍団 第47装甲軍団 第12軍団 第24装甲軍団	22B 48 47B 12B 18B 10B 33B 48B 11B 11B 22
第2装甲軍団予備		22
軍集団予備	第53軍団 第35兵団 第42軍団	23 22 15 11 112 116 116
OKH予備		22 15 11 112 116 116

W=SS(ワイクンフ)機械化歩兵師団, AH=SS(アドルフ・ヒトラー親衛隊)機砲師団, 大ドイツ(大ドイツ)機械化歩兵連隊, R=SS(ラス・ライヒ)機械化歩兵師団, T=SS(タール)歩兵師団, SS警=SS警備師団

ドイツ軍の軍団編成

地図1 バルバロッサ作戦
—1941年6月~12月—
..... 1941年12月4日の前線
--- 国境



バルバロッサ作戦侵攻図

b) ドイツ軍のソ連領内侵攻(41年6月22日)

ア) 初戦、ドイツ軍の圧勝

→ 砲撃、爆撃による国境付近のソ連軍一掃

→ 電撃戦による包囲殲滅、無線での連携

→ ソ連軍の準備不足

(要塞の未完成、装備の故障・未整備)

→ ドイツ軍とソ連軍との練度の差

(特に空軍力の差)

3. モスクワ侵攻と挫折

a) ドイツ軍の侵攻の遅滞

ア) 補給の困難

→戦線の拡大→補給線の伸長→補給の停滞

→予備部品・弾薬・燃料不足→進軍速度低下

イ) 部隊の配置転換

ヒトラーによる予定外の軍団間での部隊移動

→南方軍団の苦戦に中央軍団を一部派遣

→部隊の移動時に侵攻の停止

ウ) ソ連側の焦土作戦→相手の装備の利用不能

b) モスクワ攻略の失敗

ア) モスクワ攻撃が約1カ月遅滞

イ) ドイツ軍の戦闘力低下

→ 連戦と補給物資不足の影響

ウ) 例年より早い冬の到来

エ) ドイツ軍の冬季装備の準備不足

→ 冬季までの戦闘は想定外

オ) ドイツ占領地域でのゲリラの組織

→ パルチザンによる後方攪乱

カ) ドイツ軍、エンジンの凍結、兵士の凍傷

キ) ソ連軍、防寒対策万全

→ ソ連軍の一大反攻作戦

ク) ドイツ軍撤退(バルバロッサ作戦の失敗)

→ 第二次大戦初の後退

c) ドイツ軍の損害

多数の自殺者、凍死者

→ この年だけで20万人以上の戦死者

合計死者数→100万人以上(投入兵力の35%)

第3章 反轉攻勢

1. 夏の再攻勢(1942年6月)

a) ドイツ軍の再攻撃

ア) 冬季のソ連の攻勢から戦線を死守

→ドイツ軍の撤退禁止と

ソ連軍の幼稚な作戦

イ) ドイツ軍反撃に転向

→ヒトラー、司令部を刷新

→自分に反抗的な者を排除

b) ブラウ作戦

ア) バルバロッサ作戦の失敗→戦鬪は長期化へ

イ) ヒトラー、長期化の準備に傾倒

ウ) ソ連領内南部の資源地帯への攻勢

→前年の敗走で戦力不足

→練度・軍備ともに劣悪な同盟枢軸軍に依存

エ) 二段構えの攻勢

→ドン川→カフカス

c) ドイツ軍の再攻勢開始(42年6月22日)

ア) 戦力不足可能性

→ヒトラー、未だにソ連より質で上と盲信

→予備兵力を非準備

イ) ドイツ軍の急速な進撃

→ソ連軍の戦略的撤退→損害・損耗が軽微

→独軍、包囲殲滅の失敗→戦力不足

→撤退をソ連軍の兵力不足と誤認

ウ) ソ連の戦術の変化

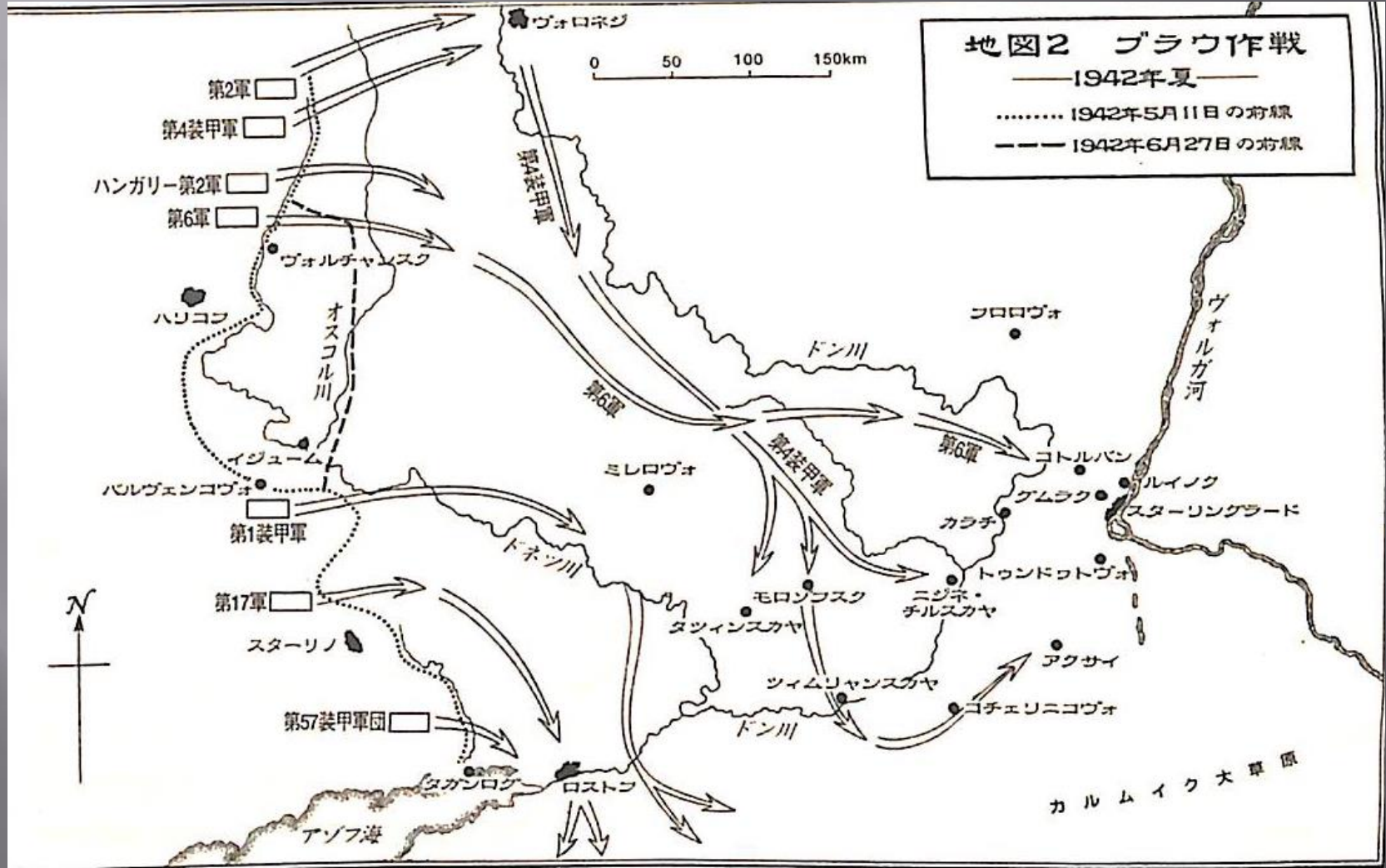
→地図上の戦線から都市への兵力集中

→ドイツ軍、攻略に苦戦

エ) ソ連軍、スターリングラードまで後退

→領土と交換で部隊を再編成

オ) ドイツ疲弊→補給困難な地点まで進軍



d) 二方面同時攻勢

→計画の遅滞からヒトラーが強行

→A・Bの2軍集団に分割編成

ア) A軍集団→油田が目標

イ) B軍集団→スターリングラードの攻略

→A軍集団がメイン→燃料の優先→B軍集団の
主力の貸与→B軍集団攻略速度低下



撤退後のソ連軍の再編に時間を提供

e) ソ連軍内

ア) 後退禁止の命令

→上官への不服従、敵前逃亡、降伏

→射殺、階級の剥奪後懲罰部隊へ編入

イ) 懲罰部隊

→犯罪者や命令違反者中心

→地雷撤去など捨て駒

2. スターリングラード攻防開始(42年8月)

a) ドイツ軍侵攻

ア) スターリングラードへ絨毯爆撃

→出撃回数1600回、使用爆弾1000トン

イ) 最初の週の爆撃で死者4万人以上

→当時のスターリングラード人口60万人

ウ) 砲撃、爆撃で市街地を廃墟化

エ) ドイツ軍、スターリングラードを包囲

→ドイツ軍、数日で攻略可能と楽観視

b) ソ連軍の徹底抗戦

ア) 撤退不可のソ連兵

→ソ連の南部最後の砦→兵士は消耗品

→突撃の強要→死体から装備を入手

イ) ラッテン・クリーク (ネズミ戦争) と擲揄

→無数の遮蔽物、廃墟や瓦礫を利用

→狙撃や逆襲のゲリラ戦

→独軍、貴重な工兵や装甲部隊を消失

ウ) ドイツ軍の電撃戦の無力化

→50ヤード(約45M)以内で最前線を形成

→電撃戦の要の砲撃、航空支援の無力化

3. ソ連、スターリングラード戦勝利

a) ウラノス作戦

ア) ソ連軍、極秘に反攻作戦を準備

→兵力100万

イ) ソ連軍のドイツ軍逆包囲

→両翼の同盟国を撃破

→スターリングラード攻撃中の

ドイツ第6軍孤立

b) ドイツ第6軍の降伏

ア) 第6軍、餓死者・凍死者増加

イ) 第6軍救出作戦失敗

→ヒトラーの横やり

→第6軍の突破撤退・降伏禁止と死守命令

ウ) 物資の空輸補給の失敗

→物資不十分

→航空部隊の損失

エ) パウロス元帥降伏(1943年1月31日)

→カフカス戦線も後退

ソ連軍の優勢が確定

c) スターリングラードでの独ソの被害

ア) ドイツ・枢軸国→死者30万人以上

イ) ソ連→死者50万人以上

ウ) 民間人の犠牲者は一説には20万人以上

エ) ドイツの損害はバルバロッサ以上に悲惨

→撤退戦で指揮官マンシュタインが

ソ連軍に大打撃→ハリコフ再占領

第4章 独ノ戦終結へ

1. クルスク戦車戦(1943年7月)

a) ソ連の攻勢への対抗

ア) ドイツ軍、ソ連の突出部への攻勢

→マンシュタイン防衛を建言

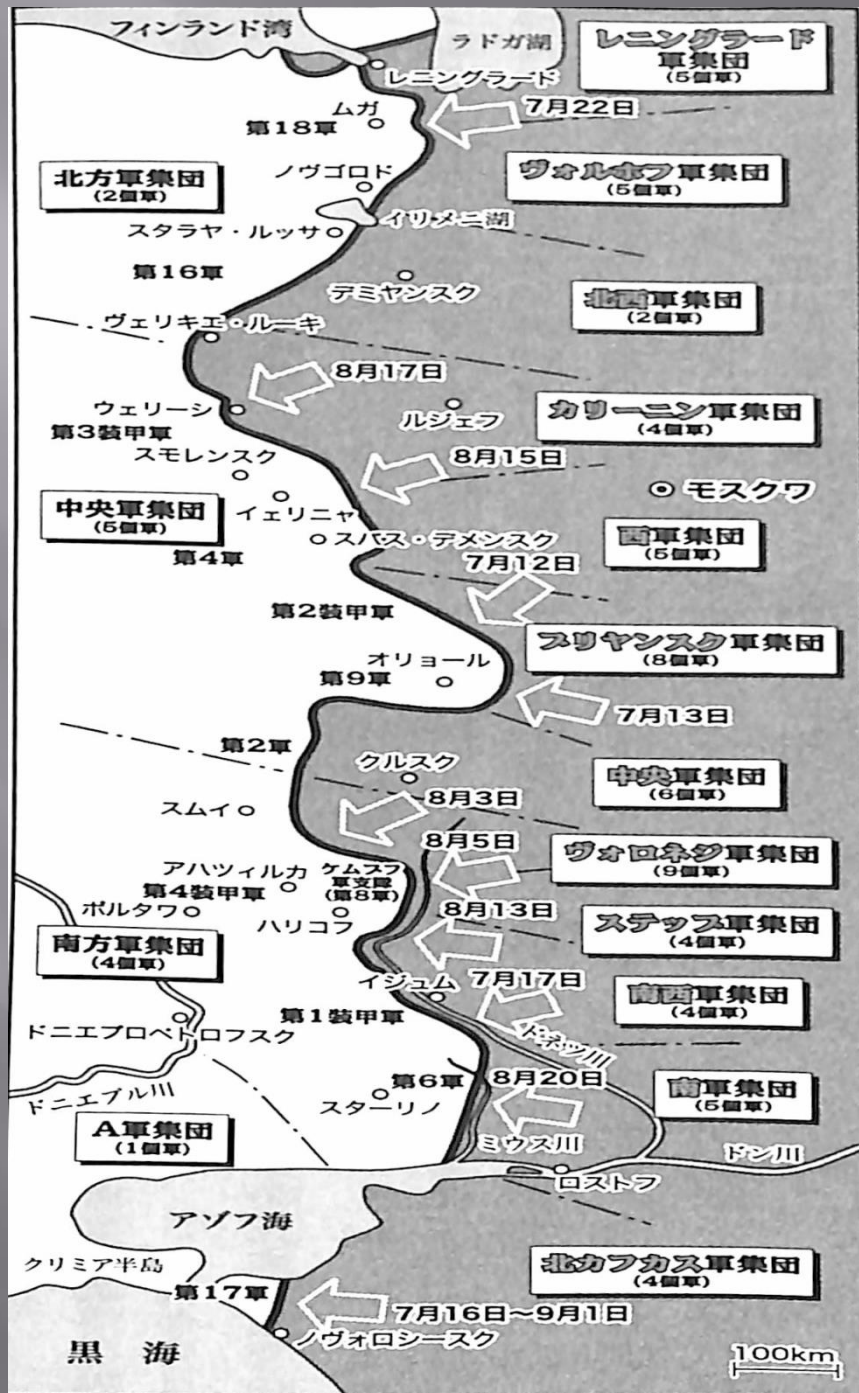
→ヒトラー却下

イ) 作戦開始の遅延

→マンシュタイン、早期開始を希望

→ヒトラー、新兵器投入まで延期

→3か月の遅延→ソ連、軍備充実



地図④ ソ連軍の攻勢準備(一九四三年夏)。ソ連軍六個軍がクルスク戦に備えて、ドイツ軍戦線の前面に集結した。これからどうなるか。

ウ) ソ連、防衛を強化

→ 対戦車塹壕・地雷原、防御陣地の形成

b) クルスク開戦

ア) ドイツ攻撃開始

→ ソ連の防御が堅牢 → 突破不可

イ) ソ連軍、包囲殲滅を決行

ウ) ドイツ軍、主戦場を迂回攻撃

→ ソ連軍、大量の予備兵力に頓挫

エ) ソ連の勝利 → 独軍の他方面への戦力移動

→ 被害 ドイツ < ソ連 → 物量の勝利

2. 東欧の開放

a) ソ連軍の大攻勢

ア) レニングラード解放(1944年1月)

→約900日間の包囲

イ) ハリコフ・キエフの奪還

ウ) ポーランドの開放

→ドイツ軍の様な電撃戦を展開

b) ドイツ軍

ア) 包囲孤立→各個撃破

イ) 東部戦線司令官マンシュタインと

ヒトラーとの対立

→マンシュタインは部隊を重視

→ヒトラーは拠点を重視

→後にマンシュタインを左遷

3. ベルリン陥落

a) ソ連、ドイツ領内へ侵攻

ア) ソ連、東プロイセンに侵入(45年1月20日)

イ) ベルリンの包囲(4月)

b) ドイツ降伏

ア) ヒトラー自殺(4月30日)

イ) ドイツ、無条件降伏文章に調印(5月8日)

独ソ戦終結

第5章 ドイツ敗北の要因

a) 国力の差

ア) ドイツは質 ソ連は量

イ) ドイツの兵器→高性能な反面、繊細で複雑

ウ) ソ連の兵器→質実剛健、簡素で堅牢

→劣悪な環境下で質での差が減少

→ソ連が数で圧倒

b) 進軍・補給の停滞

ア) 広大なソ連領

イ) 補給が困難→燃料不足、故障

→未曾有の規模の戦線

ウ) 冬季装備の不足

→ 計画段階での作戦ミス → 無謀

c) 決定的な敗北

ア) モスクワ侵攻の失敗

イ) スターリングラードの対立

→ 電撃戦の限界の露呈

d) ヒトラーと軍部との対立

ア) 作戦の急遽変更、部隊の転換

イ) 司令官の行動の制限、現場の混乱